

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

農業をとおしてSDGsを考える

～できることから始めよう【きのこ農家編(前編)】～

SDGs「持続可能な開発目標」。これは以前から「食料の供給」「自然環境の保持」「雇用の創出」など、さまざまな分野で取り組まれており、飯山市でも、重要な役割を担い、発展・変遷を成し遂げてきました。情報委員会では、昔を振り返りながら、今、そしてこれからのに向けて、個人でできることを話し合いました。まずは「きのこ農家編」です。きのこ栽培をとおしてSDGsを考えました。



春日家の 今昔キノコ話

農業委員 春日 孝利

昭和38年にわが家に妹が生まれました。それまで冬は父が静岡へミカン切りの出稼ぎに行っていました。が、冬季の仕事としてエノキダケ作りを始めました。

始めた当時、栽培ビンはガラスビンを使用していた。今のポリプロピレン製とは比較にならない重さでした。蓋は今のポリキャップと違い手作りで、コメの紙袋に油紙を入れて15センチ角位に切って、自転車のチューブを輪切りにしたゴムでひとつずつ作っていました。公会堂に共同の殺菌窯を入れ、順番で利用していました。積もった雪の中をソリで運搬するのは大変で翌年自宅に殺菌窯を入れました。オガクズと米ぬかを混ぜ込む、ビンへ詰め込む、収穫後のビンを掻き出す、袋に入れたキノコ袋



の口をねじってアルコールランプで融着する、すべて手作業でした。信濃平駅までキノコを背負って汽車のせて市場に出荷すると、もつと送れと電報があったくらい需要がたくさんありました。

高度経済成長期と重なり皆が儲かり、流通がよくなり食生活も変わってきた。キノコは儲かる品目になりました。冬季だけの栽培から秋冬春の簡易冷房栽培の時代を経て、夏を含めた。エノキ栽培からブナシメジへと変わり、キノコ小屋も建て替えて規模を拡大し、機械化して現在にいた



ります。華やかなりし頃には、「キノコ御殿」「おはよう百万円(?)」などが聞こえてきました。家族経営の家はそれなりにでした。

その後、バブル景気の頃から大企業の参入により出荷量が増え、年々価格が下がり、小規模なキノコ農家も規模拡大、機械化を考えざるを得なくなっていました。食品加工工場と同じ衛生管理を求められたり、農業への法的な規制も厳しくなったり、SDGsへも取り組まなければならないなど、一層大変な時代になりました。

SDGs「持続可能な開発目標」

SDGs (Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)) は、2015年9月の国連サミットで採択された、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標。17の大きな目標と、それらを達成するための具体的な169のターゲットで構成されています。

飯山市では、令和2年6月に策定した第2期総合戦略の重点テーマとして「SDGsの取組み」を掲げ、地方創生の推進に当たり、他の自治体や民間団体等との情報交換及び連携を図るとともに、基本目標に関連するSDGsを位置づけ、持続可能な地域づくりを目指しています。



がんばっています!

- No.50 -

「三代目」

春日 祐輝さん

(外様地区・中条)

【将来の夢】

小学生の頃、「将来の夢は、大きくなったらきのこを作りたいです!」と言ったことが記憶に残っています。高校で進路を考えたときも、祖父の代から続いている家業のきのこを自分が継ごうかと考えて、長野県農業大学校へ進学しました。そこで、きのこや農業について学ぶつもりになりましたが、花を学ぶことになりました。卒業後は新規就農者の補助金制度を利用して、学校で学んできた花を栽培しようと思



▲ 作業をする祐輝さん

【未知の世界】

わからないことばかりでしたが、花卉部会の人に教わったり、農大時代に実習に行ったり農家さんを手伝ったりしながら学びました。品目はシヤクヤクとソリダゴです。少しずつ株を増やしたり、ソリダゴの電照栽培では、毎日夜中に畑を見に行ったりもしました(発電機の盗難が心配だったので)。

しかし、花だけでは、病気が出ると思うように収入が得られないので、ズッキーニの栽培も始めました。ズッキーニも、花と調整しながら増やしています。花と作業が重ならないようにしているのですが、どうしても両方の収穫が重なったときは忙しく、一人きりなので草刈りや手入れ等に手がま



▲ 育てた野菜は、ことぶき村の料理で提供されています。ズッキーニの花(上)ズッキーニのはさみ揚げ(下)

【これから...】

わからず、なかなか上手くいかないのが悩みです。

近年の値段の低迷で我が家のブナシメジの経営も厳しい状況です。きのこ農家も年々減ってきています。きのこは飯山の特産品なのに...。このままでは美味い飯山のきのこが心配です。

「家のきのこを継ぐんだ!」という気持ちは今でも変わりません。でも今は、きれいな花・美味しい野菜を少しでも多く収穫できるように、自分が今できることを頑張ろうと思います。そして、飯山の花・野菜・美味しいきのこが、飯山以外にもっと広まれば良いと思います。

あぜ道だより



柳原地区農業委員 清水 勝

私が子どもの頃、周りはほとんどが農家で、農業が生活の糧であり、農閑期は出稼ぎで生計を支えていたそんな時代でした。

田植機も入らない小さな田んぼでしたから、ほとんどは手植えで、子どもは苗投げが主な仕事でした。隣近所や親戚に手伝ってもらい田植えや稲刈りをしたのを覚えています。協力し助け合いながら農作業をしていました。

当時、隣近所で田植えに行ったり来たりしてもらったことを「えい」と言っていました。結ばったのはと思えます。夕暮れになると「そろそろしまあねがえ」そんな掛け声が頭の中に鮮明に残っています。「まんが日本昔話」のような当時の風景でありましょ

う。機械化が進み、田んぼの中に足を踏み入れることなく米が食べられます。一方で、田んぼへ足を運ぶことが少なくなり、農地に対する思いも薄れてきたのではと感じます。「限界集落」や「消滅集落」も、決して他人事ではありません。

これから先「守るべき農地」を選択せざるを得ない状況になるかもしれません。意見や視座を交わすことが「人・農地プラン」であり、地区再生協の大きな役割であると考えます。農業委員会もその一端を担っていることを肝に銘じ、意見の一つも言えるよう勉強を重ねたいと思います。

あしあと 3・4月の活動記録

- 3月10日 農業委員会役員会
- 〃 農地相談
- 28日 3月農業委員会総会
- 〃 情報委員会
- 4月8日 農業委員会役員会
- 25日 4月農業委員会総会
- 〃 学習会